
魔方陣に願いを

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔方阵に願いを

【Nコード】

N7310Y

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

千年のときを越えて、現代に降り立つ魔法使い。

黒き闇の中、最初の魔方阵を描く。

そう、とても優雅に。

しかし、優雅すぎたのか、桃野マリモという能天気少女が偶然通りかかった。いきなりのトラブルに、戸惑う僕こと、ファウンは。

それにしても、マリモは勘がよすぎで：正体がばれる。

第一話 星の魔方陣（前書き）

魔方陣だ、魔法だ、超魔法だ。

第一話 星の魔方陣

僕は、現世に来た。

千年の時を越え、ついに来た。

僕は、魔法使いだ。名前は、ファウン。ある理由があつて、この時代、2000年代に来たのだが…。

そのためには、まず世界を見渡す必要があつた。

共里越公園、午後七時。僕は、ここの地面に魔方陣を書き始める。この魔方陣は、世界を見渡すという目的で使うこともできるし、世界から何かを呼び出す目的で使うこともできる。

千年の時を超えているので、やたらと見慣れないものが多い。

しかし、次第に分かってくる。

やはり、この世界には無くさなければいけないものがいくつかあった。

それは、この世界にある間違いの一つ、不平等と言うものである。要するに、言ってしまうえば、世直しのためにこの時代に来たのだ。

まあ、こういう行動も非難されるべきものではあるが、いろいろあつてほしい行動だ。

僕は、久しぶりに空を見上げた。

のんきとしか言いようが無いが、僕としてもこの世界が新鮮で心動かされるのだ。

ここは、東京と言う街らしい。

なんとなく、胸躍る世界だ。

おっと、そろそろ魔方陣を消さねば。

と思っていると、そこには人が居た。

「ぐああああ、誰だ、キサマ。それを見たな!!」

「おっ、やあ。あたしは、桃野マリモ。不思議な魔方陣だね、映像

が見える」

「この秘密を知ったからには、お前の正体を暴く」

僕は、魔方陣にその女について情報を求めた。

しかし、何にも映らない。

——こいつ：一体何者だ。

「もしかして、魔法使い？」

ばれた。

常識的にありえないだろ。

「そうだよ」僕ははっきり言った。「ったく、こうなったら…」

とりあえず、手駒にしておこう。

この時代に来て、早速トラブルか。

「魔法って、どうやって使うの？」

「絶対に、教えない！！」

「ホントに魔法使いなんだね」

僕は、その少女について、地道に考えていたが。

どうやら、勘がいいようだ。

仕方ないので、魔法についてじゃなく、ここに来た理由とかについて話すことにした。

「しょうがない。僕がどういう存在かと言うと、千年前の世界から来た魔法使いだ」

「あつ、時空を越えた魔導師的な？」

「ああ、君が言うとおりだ。正直、平安の世界はつまらなくってね。一人で魔法の勉強をしていたんだ」

「でも、現代には、魔法って無いけど」

「魔女狩り…みたいなのがあったね」

「へー」

「真面目に聞いているのか」

「いや、興味が沸いてきちゃって」

「なんか、このマリモっていう奴、ポジティブだ。」

「ちなみに、僕はネガティブに近いから、こんな世直ししようとしているんだが。」

「何のために、この時代に？」

「…、話すべきだろうか。」

「これを話すと、どうしてもこの世界への干渉が公になってしまう。」

「えーっと、観光かな」僕は、ウソをついた。

「おお、うらやましい」

「良ければ、近くに宿は無いかな？」

「あー、あたしのうち旅館だよ」

「意外な展開だ。」

「冗談だろ？」

「本当だよ。良かったら来てよ。最近人が少なくなっちゃって」

「ああ、それは良かった」

「良くないよ。人が来ないんだよ。来ないってどういう意味か、分かってる？」

「売れない旅館でことだね」

仕方ないので、急いで魔法陣を消して、桃野マリモ推測16歳の家の旅館に行くことに。

なんか、嫌な予感。

…。

…。

僕は、その後いろいろマリモの親達に挨拶し、状態を説明して、一つ部屋を借りた。

マリモは、颯爽と去っていった。マリモは高校生なので勉強があるらしい。

全く、厳しい親だ。まあ、僕にとっては、なんでもないが。

「魔方陣、完成」

僕は、星の魔方陣を書いた。

この魔方陣は、願いをこめることができる。

僕は願う。

「僕にこの世界の業を教えてくれ」

業…。

この言葉が、僕のここに來た訳。

そして、この業が、ふとしたことで世界をも変えてしまうことを、僕は知らなかった。

未来が、変わる可能性。

それが、存在していたのだ。

第一話 星の魔方陣（後書き）

久しぶりの投稿なので、見てもらえらなとて思っています。
これは、どんだん続きを書いていきますので。

第二話 運命の魔方陣

魔方陣が何故存在するのか、と言えば。

正確に、魔力を移すためである。

だが、その魔力と言うものが何処から来るのか。それは、人類が考えもしなかったある物体が必要であった。

『業を教えよう』

星の魔方陣が、語る。

窓から、月明かりがこぼれ、沈黙の時が流れる。

『業とは、この先起こる災いに通じている』

そして、魔方陣は力を失った。

災い？

それは一体。

とりあえず、僕は、魔方陣を適当に描いてみることにした。

この魔方陣は、時間からエネルギーを抽出する魔方陣だ。使いすぎると、世界のバランスが崩れる。

「ねえ、ファウンさん。ご飯ですよー、早くう」

そう言ったのは、マリモだった。

僕は、仕方なく、一階に下りると…。

そこでは、歓迎会が模様されていた。

「ちよっと、どういう？」僕は疑問に思った。

「あなたが、少し寂しそうだったから。あたしはパーティーを開催したのよ」

「馴れ馴れしい奴だな。僕はお前なんかとは次元が違う存在だ」

「うっ、酷い」

「くだらないことではあるが、一応楽しませてもらう。ありがたく思うがいい、はははは」

そこには、おいしそうなおでんがあった。

中はぐつぐつと、食材を温める。

僕は丁寧に、いただきますをして、お箸でそれを取った。

…

その頃、放置していた、時の還元型魔方陣は。

その近くに、ある女が居た。

「けっ、あいつくだらねえ事を始めようとしているみてえだな」

——この魔方陣は、あいつしか知らない。平安の世では並び証されていたが、結局コイツは途端に居なくなった。あいつは、裏切り者だ。

そして、その女は、魔方陣を誤作動させるように書き直した。

さらに、魔力を注入して、発動させた。

「タイムリミットは、一ヶ月だ」

一ヶ月以上の時のエネルギーをこの世界から切り離した。

そして、空に時計が浮かんた。

一ヶ月で一周する巨大な針時計。

そして、その女は、魔法の箒で空を飛んでいった。

…。

「おい、ついてくるなよ。勉強はどうした！」

食事が終了し、マリモのあほかುತ್ತついてきた。

「正直、魔法が教わりたい次第です」

こいつは、きっと病魔だ。
知らないふりをしよう。

「わーい」

油断をしている隙に、彼女は僕の部屋に入りこんでしまった。

「おっとっと」

「危ない」

マリモが、魔方阵の内側へ転びそうになった。

僕は、この時気づいた。

時の魔方阵が、書き換えられている。しかも、魔力が注入された形跡がある。

この、書き方は：僕の親友だったレイチャラー・グラムの特魂。実を言うと、魔方阵のエネルギーである魔力とは、その人間が持つ魂なのだ。それを切り離して、エネルギーにする。

そして、魔方阵が存在する理由は、少しの魂で魔力を何倍にも高める効果のため。

そう、代価は魂だ。

マリモが、今魔方阵の内へ倒れていく。

僕は、必死に止めようとした。

レイチャラー・グラムの魔方阵は、代価とする魂がかなり多い。このままでは…。

僕は、ギリギリでマリモの手をつかみ引っ張った。
しかし、遅かった。

魔方阵は、マリモのわずかな魂の代価で動き出した。

時の消失。

僕らの世界は一瞬真っ暗になった。

しかし、世界は再び起動した。

「あ、あ、どうしたんだ」呟く、僕。

僕とマリモはさっきと同じ部屋に居た。

そして、世界も普通に動いていた。

「今、世界が崩壊しました。あなたに、助けて欲しい」

桃野マリモはさっきと違う雰囲気ですう発言した。

何かが、違う。さっきのマリモではない。

「私は、マリモの心の中で眠れる意志。先ほどの魂の置換によって、私の魂が表に出ることが可能となりました」

「くそっ、僕がいながら、まさか自滅か」

「いえ、これは必然です」

「必然？」

「あなたに、確かめて欲しい。運命の魔方陣で」

言われたとおり、僕は運命の魔方陣を地道に描いた。

そして、発動させた。

すると、空に巨大な時計が見えた。

「これは？ 何なんだ！」

「あれが、道しるべとなる。タイムリミット……。あなたは、運命に操られてしまう存在。そして、私が、あなたを変える存在なのです」
続ける、マリモ（裏）。「そう、あなたはレイチャラー・グラムの存在に気づかず、この時代に来てしまい、この最悪の未来が訪れようとしている。彼女が一体、どれほどの世界を壊してきたことか」

「つまり、あのタイムリミット以内に時間を元に戻さなくちゃならないんだな」

「ええ、しかし、これは俗に言う業が絡み合っているという、奇奇怪怪な状況なのです。ゆえに、あなたは全力でこの業の絡みを解明しなくてはならないのです。これこそ、運命からの出題。これを、解決することは、あなたの願いを叶えることにも繋がっているのです。不思議なことに」

「僕の願いは、世直しだ。言うところと恥ずかしいけど」

「この業には、世界を良くする結果が伴う。あなたは、そのダブル・アンサーを見つけるしかない。それが、あなたを繋ぐ」

僕は、この地味な旅館で、のんびりと世直ししていくことを計画していたが。

ここからは、全く違うものとの戦いになることを悟った。

僕は、そのマリモの正体にはつきりと気づきつつも。

魔方阵の力が及ばない、試練に動揺しながら、そこに立ち尽くすしかなかった。

第二話 運命の魔方陣（後書き）

自信がないけど、続きを書いていきたいと思う感じです。気が向いたら、何度も読んで欲しい。

第三話 詳細のグラム（前書き）

これは、第二話レイチャラー・グラムの詳細です。

第三話 詳細のグラム

眠い。

そう思ったのは、必然だった。

不老不死の身体だとはいえ、魔方陣を発動させると幾分疲れるのだ。

ところで、不老不死になったわけは、一度死んでいるからだ。

つまり、私はゾンビというわけだ。

それでも、魔法で生きている。

これといって、不便も無い。

私は、偶然例の男、ファウン。いや、(F)がここに来たことを魔方陣で知った。ファウンも千年後の世界へ来ていたということだ。

「つたく、魔法使いとしては一流だが、どこかアイツは間抜けだ」

私はこう考えている、ファウンは優しすぎるのだ。

そういう人間は、何時か失敗する。失敗しても立ち上がれない。

上空百メートルを飛んでいる。

眺めが綺麗だ。

「ファムファムファム」

そう鳴き声をあげた、ミニドラゴン。こいつは、私のペットだ。

未来に居たとき、なんかついてくるのでペットにした。最初は、巨大なドラゴンになると思って期待していたが、こいつはこれ以上成長しないようだ。

正直、呆れる。

最近では、鳴き声の意味が分かるようになってきたくらいだ。しゃべって欲しいのが本当のところだ。

「どうした、何か反応があるのか？」

「ファムファム」

あの、旅館か。

名前は、『桃野屋』で外装はちよつと古い。それにしても、あそこから魔法反応が。

一体、誰が？

「ファムファム、ファム」

えっ？ その前にこっちって？

私の魔方陣の筈は、進路を変えて、旅館の裏へ。

「あなたは…、ファウン？」

私達は着陸して、すぐにファウンに出会った。

「ファウン、久しぶりね」

なんとなく、照れながらそう言った。

そのとき、ファウンはこう言った。

『死人が、歩いてるよ。ケツケツケツ、お前はクズだ。最低な奴さ』

「仕方ないでしょ、それに最低って…」

『この世界をオレは崩壊させる。お前もそれと同時に消す。邪魔するなら殺すぜ』

「お前こそ、死ね！ 信じてたのに」

私は、そうしてその場を去ろうとしたが、その時たまたま魔方陣を見つけた。

その時、凄く悔しくて、気が動転して酷いことをした。

それが、世界を変えてしまうなんて知らなかった。知っていたけど、もうどうでもよかった。

——もしかしたら、千年後の世界に来ること自体間違っていたのかもしれない。

それが、最悪の結果を生む。それに早く気づいていれば、魔方陣

なんて書かなかっただろう。この結果も、世界が決めたことかもしれないが。

私達は、どこかで道を踏み外した。

第三話 詳細のグラム（後書き）

少し、ストーリーの詳細を書いてみました。さて、本編の続きは、また次回。

第四話 拡散の魔方陣（前書き）

第二話から

第四話 拡散の魔方陣

「あなたは、どうして…魔法で世界を変えたいの？ どうして？」

そう、夢の中で呟く誰か。

「…、誰？」

「ねえ、どうして？」

「僕は…」

僕は、その理由がなかった。結局ところ、僕のしようとしていることに本当は意味が無いのかもしれない。

「未来は、それぞれの行動の結果から作られる。そして…あなたはそれを理解していたの？」

「何が…、言いたい？」

「あなたが変えたことの中に大切なものが存在していたら…どうするの…」

「それは…」

結局、僕は間違っていたのだ。行動に正義も悪も無い。結果が残る。

その時、腹部に衝撃があった。

僕は一瞬死ぬかと思った。

…。

…。

「ぐあああああああ」

僕は、高らかに叫んだ。

「起きた？」

そこに居たのは、にっこり笑っているマリモだった。

僕はその目に殺意を感じたので二秒で起きた。

それにしても、あいかわらず世界は動いている。どうして？

その時あの言葉を思い出した。

『タイムリミットがある、それをクリアするにはあなたは正解を導かなくてはならない』

そんなことを言っていた。

ふと、気づいたがマリモの内なる性格は表に出ていないようだ。しかし、ちょっと試すか。

「昨日、転びそうになったとき、僕は下敷きにされたんだぜ。酷いなー」

「うーん、そうだった。記憶があいまいでさ」

「そうか：かなり痛かったっていうのに」

なるほど、憶えていないか。

適当にあしろうか。だが、今度の魔方陣は失敗しない。僕は、おもむろに押入れを開けた。

そこには、すでに魔方陣を書いておいた。そして、再び閉める。

「じゃあ」さらっと、僕は言った。

「って、ご飯は？」

「五分後に行くから」

入り口を強制的に閉めて、密室状態。

そこで、また魔方陣の在る押入れを開く。

この魔方陣には、一つの物体を拡散させてあらゆるケースの対処を示す魔法がある。

おそらくこれで呪文を唱えれば、分かるだろう。

この先の出来事が。

「僕のいるこの世界が今示していることを教えてくれ」

そう言って、自らの魂を代価に払う。指から自然に魂は出る。一

般に触れば自然と魂は移るということ。魂は、常に代価として払われている、それが生きるということであるから。

ビジョンが見えた。

『世界が、終わる…』 『たった三日で？』

『僕は何をすればよかったんだ』

その言葉に、マリモ（裏）は答えた。

それは…。

『グラム心の死…』

という言葉。

僕はその予知を聞いて、その意を悟った。

恐らく、グラムに関わらなかった、そのせいで…。

まだ、グラムに何が起こるかを調べていないが、どこにいるかなら大体知っている。

ここに来る前から、グラムの位置は大体分かるのだ。魔法以前に、僕達は親しく繋がった仲であるから。特に深い意味はないのだが…。

僕は押入れを閉めた。

僕はふと、布団に横になった。

「何が起きているんだ…。まだ分からないことだらけだ」

静かに天井を見上げ、少し疲れを感じた。

「知らないところでいろいろなことが起きている。なんで僕はそれに気づけないんだろう」

その後、しつこくマリモが呼ぶので、渋々食堂へ。

「ねえ、これ…何です？」

「あー、おいしそうでしょ。私が作ったの」

「おいしい」

これ、泥団子じゃないか。

知能レベル低すぎだろ。

と真面目に思って、よく見たらチョコレートの団子だった。

「なんて、泥団子っぽいチョコなんだ!!!!!!」

それにしても、朝食これだけ？

「なあ、僕の朝食は、昨日みたいなのないの？」

「あーあーあーあ、もうない」

意味不明だ。

だが、もうここにいるだけ時間の無駄だ。マリモは天然で、この旅館の人もほとんど見てみぬふり。

呆れて物も言えない。

「とりあえず、しばらく外出するから。店番をよろしく」

「何処に行くの？」

「何度も言うが店番をよろしく」

僕は、人間転送を使った。

これは、魔方陣を体を書いておくことのできる。

すると、向かった例の場所にレイチャラー・グラム。通称レイが居たのだった。

…。

…。

「やっぱり、ここにいたね。レイ」

そこは、一面の花畑だった。

色とりどりの花が、あった。特に印象的なのがバンジーだ。レイが好きな花の一つ。

「相変わらず、花が好きだね」

そう話しかけると、レイは泣いていた。

「どうしたの？ これ…」

「え？」 驚いて振り向くレイ。

ハンカチを渡した。

「なんで、来たの？ あなたは世界を壊して自分のものにするんですよ」

…ん？ そんな設定？

僕は全く身に覚えが無いが…。

この空気は…本気だな。

「あっ、それは思いつきさ。もう全然そんなことをする気は無い」
適当にごまかす。

ちよつと適當すぎたのか、レイは感動したようで。

「ほんとう？　ほんとに？　私ずっと引きずって」

「あー、それは悪いことをしたね。心の底から謝るよ。っていうか、それ僕の偽者か何かが言ったことだよ。魔法で化けていたんじゃないかな」

「冗談でも、嬉しい」

とりあえず、状況は良くなった。

マリモ（裏）の言っていた、世界崩壊を止める方法ってこれだけじゃないはずだ。

んー、これからレイと共に行動しなくちゃいけない気がするな。

…。

その後、レイはレイのした業について話した。

「やっぱりね。それは分かっていたけど、そんなことがあったのか」

「それより、あれは本当に偽者？」

「信じて欲しい」

僕たちは、そう言って和解した。

これで、一つの障害はクリアしたということ。それにしても、レイが見た偽者って、ずいぶん前から魔法使いの間で噂になっていた（デスメーター）じゃないかな。

確信は持てないけど。そんな大きな組織のようなものが関係している気がする。

これと言って、証拠も無い今は、魔法に頼るしかない。

一つだけ確かなことがある。『あの日の出来事』にはまだ秘密がある。それだけは確かだ。

第四話 拡散の魔方陣（後書き）

地道に書いて、やっと四話。本当に時間は無駄にできないな。

第五話 勇気ある者とグランデック魔方陣

あれから、すでに三日経った。どうやら、タイムリミットは長引いたらしい。

それにしても、レイチャラー・グラムの見た僕の偽者の正体は、デスメーターだと確信できる。

ところで、僕は今部屋にいるのだが、何故かグラムが後ろに居る。ゾンビなのに若々しい顔でにつこりとこっちを見つめているのだ。

正直、気味が悪い。

「おい、どうした？」

「愛しているのよ」

大丈夫か、グラム。

「はあ？」

もう、相手にしないぞ。

それより、考えるべきことが山ほどある、今まで見たいにのんきにして入られない。

何を考えているかと言うと、どの魔方陣が一番この状況を解き明かすのに最適かということ。

「まったく、それよりマリモ知らないか？」

あいつ、魂を奪われて少しは体力がないはずなのに、裏の人格のおかげで相変わらず元気みたいだ。

グラムも僕といえどほっとしているのか、のんきだ。

どういつもこいつも。

僕は、ふとテレビを見つけた。随分前から、知っていたものだ。魔法で未来をのぞくことができたから。

気になったので、僕はリモコンで起動させた。

『謎の時計盤が上空に見えます。これは一体どういうことでしょう。この東京一体が、孤立した状態です。外部に連絡も通じません。私

達はどうなってしまうのでしょうか』

『もしかしたら、不思議な力がこの世界に存在しているのでは？』

『それより、宇宙人かもしれませんよ。これは大発見だ』

…。

…。

最後の人、のんきだ。

テレビをしばらく見ていたが、相変わらず東京が孤立していることぐらいしか分からないな。

「ふあああ」

最近あまり寝ていないので、目の下にクマができた。

「なー、グラムまたはレイ。お前の魔方陣でこの状況を解析することとできないのか。お前なら、どんな凄い魔法でも不死だから使えるだろ」

「ん？ それはね。いいけど、何が目的なの」

「そうだな…、これをボードゲームだと考えて…、戦況を教えるもらうとか」

一応、これでも大丈夫だから候補の一つを言った。

グラムは、早速魔方陣を書いた。でも、これは普通の魔方陣ではないようだ。

恐らく、これはグランデック魔方陣。

これは、一万年後の未来で獲得された究極の魔方陣だ。

「私は、未来のあらゆることを体験している。だから、こういうのも分からないわけ無いでしょ」

自信満々に、グラムは言った。

とりあえず、普通の魔方陣よりは効果が期待できそうだ。

「こういう、戦況とかって。かなり正しくないと、結果が期待でき

ないから」

ふーんと、僕は眺めていると、早速魂を挿入したようだ。

『この戦いの勝敗はすでにおおよそ見えている。しかし唯一の正解が存在する』

魔方陣が語りかけてくる。

『この戦いのポイントは勇氣…。どんな勝負でも勝敗を握るのは、危険を承知で進む強さ。その強さが、備わっている人間は、ファウン(F)だけ』

…。

…。

しばらく、魔方陣は何を言わない。

『すべては、神の意志で動く。戦況は無い。その中でも言えるのは、最後のファウンの勇氣である。具体的に言うなら、デスマーターには勝てないが最後にチャンスが来る』

その後、魂の持続時間が切れた。普通の人間の命なら100年分だ。見たところ、グラムは恐ろしい奴だ。

それよりも、驚くべきことはデスマーターが存在することをほのめかしたことだ。

結局、デスマーターの正体は教えてくれなかったが、今までのことから、策略的陰謀を仕掛ける組織のようだ。

それによって、世界を崩壊させる。

シンプルな奴らだ。

それでも、神の意志が関係していることも驚きだ。最終的に神についてさえさっぱり理解しようが無い。

「レイよ、どう思う？ 死人として」

「その通りだけど、最後の言葉むかつくわね」

「いいから」

「えーと。どうせなら思い切れてことじゃない？ 特にファウン。あなたはきっと頼りないと思われるんだわ」

：グサッ。

傷ついた。

「しばらく、僕はマリモを探して、もっと有効な情報を得たいので去らば」

「あたしも行く」

こうして、消費した三日間。

しかし、この三日間の過ごし方にも、問題があった。

そのことに気づいたのはもっと後になってからだった。

マリモは、ついに行方不明になった。

いや、もうこの世に存在していなかったのだ。

デスメーターによって。

僕は、自分を追い詰め悔やみながら、旅館の一室へと戻ってきた。そこには、グラムが何故かやばい状況なのに、にっこり笑って立っていた。

「もう、時間が一日しかない。駄目だ」

『いいえ』小さくそんな声が聞こえた。

グラムはもっと大きな声で言った。

「過去を変えるわ。一緒に時間移動しましょう。私達は魔法使い、それくらい余裕だわ」

過去に戻るなんて、平安の魔法には出来ない。

が：、グラムは未来の最新の魔法を知っている。

そういうことか。

僕は、それに気づいて、立ち上がった。「まー、これは魔法使い

の定めてところか」

僕は、勇気を振り絞り、戦うべきときのために最善を尽くそうと
硬く心に誓ったのだった。

第五話 勇気ある者とグランデック魔方陣（後書き）

魔法使いはタイムトラベルができるのは、知っていますか。例えば、ハリー・ポッターのアズカバンでハーマイオニーが使っていたよね。ってなわけで、これもアリでしょ。見てくれて、本当にありがとう。ライフがゼロになるまで書き続けるから、そのライフが尽きたときに最終回ってことで。

第六話 追憶の世界（前書き）

あらすじ、ファウンとグラムは過去の世界にタイムトリップした。

第六話 追憶の世界

「グラム……。何してるの？」

幼いレイチャラー・グラムは何かをひたすらに書いていた。

「教えられないわ」

「えー、教えてよ」

「仕方ないわね。これが、世界を変える力を持つ魔方陣。ウソっぽくて笑っちゃうかもしれないけど、本当に効果があるのよ」

「ぷっ、信じられないよ」

「笑ったわね（怒り）」

僕は思わず怯えた。それ以来、僕は何故かグラムに対して頭が上がりなくなっていた。だから、正直下僕と主の関係だった。

そのせいか、時々グラムは魔法のことを教えてくれた。

ちょっとした、トラウマも多いが、それも思い出である。

ある日、グラムは魔方陣の本当の仕組みについて教えてくれた。

「魔方陣は、風と太陽をイメージして書くのよ」

「風？ 太陽？」

「あなたみたいな間抜けには分からないでしょうから、大体でつかみなさい。世界が、風を意味する。風は何故起きるか。それは太陽熱によるもの……。そういう、大地の循環を基本ベースにするの。でも、やっぱりそれだけじゃ、人が力を借りることはできない、だから……」

（回想終了）

魂を使う……。か。

懐かしいな、こうやってグラムと一緒に居るのは。

グラムは、一流の魔法使いであり、僕の師匠だ。

だから、なんとなくその頃を思い出してしまう。

グラムと一緒に過去へと飛んだ。そう、ここは20XX年の僕がここに来た二日後である。

グラムを探しに言っている間に、マリモがどこかへ消えた。ゆえに、世界がやはり崩壊するということで、僕たちはこの世界に真実を求め舞い戻ってきた。

場所は、やはり旅館の裏口。

「マリモが、何故さらわれたかが問題なのか。さらわれないようにすることが問題なのか。どっちだろう」

僕は、自問自答するようにグラムに尋ねた。

「難しいわね。とりあえず、魔法を使うって言うのはどうだい？」

僕は、仕方がないので、この間役に立った、道しるべとなる魔方陣を使うこととした。

「拡散の魔方陣ね。これは随分と古風なものを使うのね。私なら、もっと効果的なものを選ぶのに」

「いや、実はこれは一部書き換えてある。だから、未来で使われているそこらの魔方陣よりは正確だ」

魔方陣は、新たに発動した。

映像が、浮かんでくるのが、この魔方陣の特徴である。

『るるるん♪ るるるん♪』

のんきに外を歩いているマリモ。どうやら、影の人格ではない。何故か、町を一望できる標高の高い広場にいた。

『この世で、一番美しいのは誰かしら』

そうマリモの後ろでささやいたのは、旅館に居るはずのマリモの母親だった。

『あつ、ママじゃん。どうしたの？』

その時、彼女はナイフで刺され、崖の下にまっ逆さまとなった。

一瞬だけ、声もイメージで伝わってきた。

『――私を助けて、ファウン。私、実はいろいろなものに狙われていたの……。とっても辛かった』その言い方は、紛れも無くマリモ（

裏)だった。

僕は、そのイメージから考えられる、解決策を模索した。とりあえず、マリモは昔からいろいろなものに狙われる体質らしい。

今分かるのは、それくらいであり、マリモが普通じゃないのは会った時から分かっていたことである。もしかしたら、運命かと思うが、それは結果論だと割り切る。

「おい、ミスターアンドッド」ジョークのつもりだった。

その時、グラムは思いつき、僕の顔をグーパンチ。

そうして、僕は永眠した。

さよなら。

さよなら。

「つて、死ぬものか！ 本当にすみませんでした」

「謝っても遅い。全く、ファウンは何時からそんなキャラになったんだ？ 前は子供っぽかったのに」

「知らん。あんたがどこかへ行ったせいだろ」

…うーんと。

この話題は、また今度にしよう。

「ゴメンゴメン。殴りすぎちゃったね。それにしても、あんたマリモから好かれてるね。まあ、それよりも…。正直、マリモが後数時間で断崖絶壁から落下してしまうという運命は問題よ」

「ああ、それは理解している。しかし、これはどっちを止めるべきなんだ。マリモの母さんか、マリモの行動か」

「それは、当然どっちもよ。まずは、マリモに定めを教えるしかないわ」

僕達は、こうして、マリモが通るであろう、『笹原元広場』という広場へ向かうことにした。

だけど、本当に、僕は頼りないな。

本当に、勇気あるものになれるのだろうか。しかし僕は、魂をす

り減らし戦うのみ。

向かう道で吹いている風が、ものすごくきついのは、人生と似ている。

そして、きっとその先に希望があると信じていることさえも。

第六話 追憶の世界（後書き）

かっこつけない感じで、魔方陣はクールですよ。魔法カッコイイ。最高。オタクになりそうですね。なーんて、特に詳しいわけではないですが。

第七話 マリモの謎（前書き）

そろそろ、謎が解けていく。

第七話 マリモの謎

マリモを、僕達はようやく見つけた。

そこは、真っ暗で、街灯も少なかった。

「あっ、居た」

僕は、あからさまに言った。それに、マリモも気づいた。

「ん？ なーに、ファウン？」

とりあえず、説明することがある。

前にも言ったように、マリモが殺されるということ。

「お前は、数時間後に殺される。お前の母親にだ」

すると、マリモは突然笑い出した。どうやら、バカにしているようだ。

かなり、不気味だ。

「前にも言ったけど、この世界には秘密が存在しているってことなんだけど。実は、それがこの時間に現われるから。あなたの魔方阵にウソの情報を紛れ込ませたのよ、私」

「は？ どういう」

グラムは、しばらく何も言わない。何となく、知っていたのだろうか。それとも：動揺しているのか。

「あなた…、この世界の創造主じゃ…ないでしょうね」グラムは重い口を開けた。

その質問に、マリモはこう答えた。

「それ、全くのお門違い。それなら、ここまで不便な世界にはしないでしょう。それに対して正確な答えを返すなら。私は特別な存在。この世界においてたった一人の特異点。そう…どこかのゲームや、アニメにあるそういう存在。ゆえに、この世界に魔方陣形式の魔法が存在することに気づいていたわ。本当は、表の人格を作る必要はなかったのだけれど、例の『デスメーター』通称悪の組織に対抗するためにあえて身を隠していた。しかし、今回の一件はガセ」

僕もいろいろと質問したいことがある。

「なあ、マリモ。お前は どうしてこの時間帯にその何かがあるって分かったんだ？　それが何かを教えてくださいよ」

「見ていれば分かる」

突然、空から雨が降るように、粉のようなものが降ってきた。
しかも、その粉が何かを描くように綺麗に並んでいく。

「魔法ね」 グラムは、断言した。

僕は、その並び方で最悪の魔方阵が描かれていることに気づいた。

「神が、…魂を欲しがっている」

神の逆鱗ゴッドズ魔方阵。

「そうです。今、世界は暴走している」 真剣なまなざしのマリモ。

ありえない、あの魔方阵はこの世に存在しない物質を代償にしな
いといけない非現実な魔方阵。

これは、タイムトラベルにタキオン粒子が必要なことと同列。

あの、魔方阵は、『死』を代償にして描かれている。

全く逆の性質だ。

「死を代償にできるのは冥界に行った者だけだ」

そうマリモ（表裏）は言った。

「神が、魂を欲しがっているのは何故？」

グラムは、叫ぶように、呟いた。

僕は、マリモが知っていることに気づく。

「教えてくれ、マリモ」

「どうやら、言うしかないようですね。これはもはやすべてを知っているわけではないのですが。神の逆鱗に触れた理由をお話します」

…。

…。

徐々に魔方陣が描かれる。

そんな中、話が始まった。

「あの日…、すべてが壊れました。それは、ファウンさんが私の家に遊びに来ておもしろ半分で魔方陣を書いたことによります。最終的に何の問題も無いように何も起こらなかった魂の一部の吸収」

「それがどういう？」 グラムは問いかける。

「私の魂は、ウルトラレアだといえは分かりますか。中毒性があるんです。あなたたちならお分かりでしょうが、魂の種類はたくさんあるのです。私は、人類にこの先大きな影響を与える、存在だったのです。そこにあなたたちが時を超えてやってきた。それは世界にとって大きな誤算です。もはや、世界も崩壊せざる終えなくなったのですよ。そして、今回の魔方陣が示すように、私の魂を世界が奪いたいと考えている。イワユル、リセットです。神や、仏陀にとっでは世界の一つや二つ、どうってことありません。間違えたら作り直せばいい。きっと、魔方陣の存在が、すべてを崩壊へ導いたので。しかし、悔やんでも仕方が無いのですよ。魔方陣は、決して敵ではない。敵は、この世界そのものだった。ようするに勝てばいいんです。死にたくはないでしょう？ 当然、あなたなら、もうすでに分かっているはずでしょう」

そう言って、マリモは、僕を見た。

レイチャラー・グラムはちよつと嫉妬していた。

「ああ、僕は、最後に役に立つ切り札なんだろう？」

「ええ。ところで、今からどうすればいいのかを二つに分けて説明します」

そして、マリモ（表裏）は地面に文字を書いた。

「言っておきたいことが一つ、決してあの日に起こった、魂の吸収を止めてはいけません。それは、神に対する冒瀆であるからです。それをしたら、その時点で世界は滅びるでしょう」

一つ、神の場所を探す。恐らく冥界。

二つ、神に交渉する。

「なあ、神って本当にいるの？ 有り得ないだろ」

僕は、徒然と言った。

「常識的ですね。細かいことは後で説明しますよ」
そう言って、マリモは、その場を去っていった。

…。

……後日。

「デスマーターがどういう存在か、あなた達はまだ分かっていないようですね」ものすごーく、上から目線でマリモは言った。「えーっと、デスマーターはこの世界特有の副産物であります。まあ、他の世界なら飢餓や貧困、災害などさまざまな形であらわれるのです。いろいろありますが、この世界ではそういう、元から備わっている特性のようなものとして、デスマーターが居るのですよ。あなたなら分かるでしょう。そして、デスマーターこそ、この世界で倒さなければならぬし、完全に倒してもいけない存在なのです。だから、ほどほどに戦えということですよ」

なーんて、訳の分からないことを、のんびりマリモは言ったのだった。

本当かどうかは、すぐはつきりしたのだが…。

僕が、凡々に冥界へ行く魔方陣を書いていると、手伝いもせずにグラムは、なんか近頃、僕に色目を使ってくる。

全く、状況が分からない。

グラムは、いつもはしっかりしているのに、なんかぼーっとしているようだ。

世の中は不思議で一杯だ。大体、神ってなんだよ！　って思っちやうな。

第七話 マリモの謎（後書き）

小説を書くのは、大変です。そんな不条理ありながら、僕は今日も執筆を続ける。

この作品を、どう思いますか？

第八話 詳細のマリモ（前書き）

本編とは離れたこれは、七話で二人を待っているときのマリモの行動についてです。

第八話 詳細のマリモ

「あーあー、世界がここまで滅びかけるとは…」

私、マリモは例の広場で空を見上げていた。

まったくと言っていいほど、本来の状態からズレている。

ここまできると、戦争が起こってもおかしくない。

私にとって、この世界はただの世界ではない、永遠に住む世界だ。

私は、人の身体を移動して生きている。時に、その体の中の人とコンタクトも取る。

それは、私の使命だから。

「この世界が求めるとき時、私は現われなくてはならなかった。しかし、今回の事件の原因は私の注意不足…本当に世界から孤立してしまった」

外は、真っ暗でどうしようもなく悲しい。

不自然な答えには不自然なものしか帰ってこない。

それと同じように、こんな世界では、きっと何も生まれない。

…。

…。

少し、ボーっとしていると、なんとなく背後に黒い気配を感じた。すぐ振り返る。

「あなたね。この世界に選ばれし者の一つ、デスマーターは目の前にいる黒い影。」

それが、徐々に色濃くなり、ようやく姿形がはっきりする。

邪悪なマントに、人間の中でも不気味な狂気の男。

「貴様を消そうと思ったが、消せないようだね。貴様はすべてを知った上で行動しているから。本当は貴様が神なのでは？」

男は、にやりと笑った。

その質問に、私は答える。

「お前は！ デスマーター幹部の一人か」

「ああ。そうだ。最終的に君がこの世界に居続けるといえるのはどうやら決まっているようだ。しかし、あの二人はどうか？　あのフアウンと死の保存は…」
リライト

「それも、私は知ってるとしたら？　それくらい造作も無いことだから」

「ふあはっは、それは流石にムリだ。お前の行動力は限られている」

「でも、あの子たちには力がある」

「そうか…、じゃあその言葉をいずれ確認するでしょう。今だけは、世界の崩壊が止められているが、それも直に無くなる。その先に我々はある。いずれ、戦うことになるだろう。神を探すことはできるかな？　それとも、我々に泣きつくか？　協力はしないが、ヒントを与える」

「…」

「神は、見えない。フフ」

…。

…。

神が、見えないの意味はまだ分からない。

だが、きっと、行き着く場所に答えはあるだろう。その答えを見つけることこそが、きっと私達の使命なのだ。

「この世界を救うことが、できればきっとデスメーターが関係してくる。それが分かった。しかし、それにしても、寒い。もっと厚着

にしてくればよかった」

半そでの、スカートはこの時期キツイ。

○○○

○○○

○○○

僕ことファウンは、思う。この世界にあるものすべてが、幻なのだ。何故なら、それくらい時間の中では儚いから。だけど、僕は信じて前に進み、今自分が何をできるかを考えなくちゃいけない。そして、いずれ辿りつきたい。

この世界に隠された、秘密と。

たった一つしかない、僕ら自身にとっての真実に…。

これから、終わりが始まる。

第八話 詳細のマリモ（後書き）

現実には本当に厳しいものであると、最近思う。ところが魔法があれば、そんな心配は全く無いとも思う。

さて――感想が少しくらい欲しいな。面白くないなら、仕方ないんだけどね。でも楽しんでもらえれば、いいんだから問題ないよ。

第九話 神に会うには… (前書き)

本編です。

第九話 神に会うには…

僕達は、迷宮のような、この世界にいる。
…。

「ふあああ、魔方陣は書き終わったけど。これを巻物にしておくことで、一体どうなるっていうんだ？」

僕は、露骨に尋ねた。

ちなみに、この時間は、タイムリミット三日後の最後の日だ。行ったりきたりしているから、もうよくわからないが。

「私は、もうすでに神にあう方法には見当がついています」

「え？」

「シンプルですよ。実は、例の私の魂の一部がとられたとき、そこには神がいたのです。つまり、神に会うには、その私の魂が取られるという状況の中、あなたが書いた魔方陣で、神の世界に入り込めばいい」

「なんで神がいたってわかる？」

「魔方陣は、実は神を呼ぶ作業だからです。だから、世界崩壊まではじまった」

「初耳だな」

僕が、じっと考え込んでいると、レイチャラー・グラムも、意見を言った。

「あたしも、神の存在はイマイチ信じられないけど…正直そこに神

がいたと考えなければ、いや神の一部でも存在していたと考えなければいけないんじゃないかしら？」

「ふーん」僕は、イマイチ納得できないが、大体分かった。「ん？じゃあ結局タイムトリップして、過去にいくわけだろ？」

「はい」マリモは答えた。

…。

…。

…。

僕達は、あの日の瞬間に戻ってきた。もちろん、姿は見えないように透明になって。

「ちよっと、待てよ。神にあったとして一体、どうするんだ？」僕は、質問した。

「深く考えることはありません。気合です」

「気合？」マリモの適当な言葉に、少し不安になる。

グラムは、ここで何故か決心して、思いを伝えることにした。

「ファウン…あたし。あなたのことが好きでした」

驚きつつも、僕は冷静に。

「薄々分かっていたよ」と言った。

ここで、断ったら殺される。

僕は、恐怖を感じた。

「あー、えーっと」グラムの、目が鬼のようになっていく。

オドオド。挙動不審。

しかし。

マリモは全く無視した。恐らく、ふざけている場合じゃないのだ

ろう。

「最後に、忠告すべき点があります。私達は、いつだって繋がっています。だから、どんなことがあっても、不安になったりしないでください」

僕達は、無言で頷いた。

そして、僕は神の世界に行くために、特殊な魔方陣『MH6魔方陣』を発動させた。

皆の、魂を代価に。

「僕達は、また会える。必死に立ち向かったその先に、きっといい事があるさ」僕は、このセリフがどうしてもいたかった。

僕達は、こんなところで終わるようじゃ駄目だからだ。

その後、魔方陣は急速に発動し。

最初に使った、魔方陣を主軸に、光が広がっていった。

…。

…。

僕達は、神の世界に着いた。

しかし、そこは神の世界だとは思えない世界だった。

空気が汚れ、すべてが邪悪に染まる。闇の世界。

「息が苦しい」

振り返ると、どこにも二人は居ない。

どうやら、バラバラに飛ばされたらしい。

僕は、あまりに汚れた空気で気を失いそうになった。

『起きて、ファウン。あなたはこんなものじゃないわ』

謎の声。

この声は…。

この声は確か。

それは、希望の光だった。

『この先を、ずっと行けば、神の核である母体にたどり着く、そこ

へ行きなさい』

僕は、正気になった。

究極魔方陣、起動。

「僕は今、神をも凌駕した」

それは、マリモの切り取られた魂の声だった。

そう、マリモは僕なんかより、よほど救世主だった。そこに僕がまぎれてややこしくなった。

だから、その借りは、僕がこの魔方陣で返す。

究極魔方陣は、その魂の半分以上を削り取る。しかし、そうでもしなければ勝てるはずが無い。

「待っててくれ、マリモ、グラム、そして滅びかけている世界よ」

第九話 神に会うには…（後書き）

一気に、クライマックス。正直、ここまで魔法物が難しいとは思いつきり、最終回に繋がっています。僕達は、魔法で繋がっている。だから、最終回を楽しみにしててください。

君たちの、世界にデスメーターが居るとしたらどうしますか。恐らく、気づかなかつたら、騙され続けますね。では主人公の最後の賭けに、世界は感動するのか、しないのか。とりあえず、楽しんでもらえればいいですね。

最終話 b a d e n d (前書き)

最終です。

最終話 bad end

僕は、この世界で呼吸している。

僕は、全力で走っている。

神がどこにいるかは、分からないけど。

とりあえず、走る。

さっきの声は、もう聞こえない。

『ふあはははは』

突然、笑い声が聞こえた。

目の前には、暗闇よりも真っ黒な存在デスマーターが居た。

『私を忘れては居ないか』

「何しに来た？ 僕は今から世界を救う」

『まあ、聞け。神を倒す方法にあてがないだろう？』

「そうだけど」

『ふ、では教えよう』

デスマーターは、僕にこう言った。

『不完全な魔方阵を使え』

「どういうことだ？」

『不完全な魔方阵は、神が創りえないものだ。つまり、その時点で神はイレギュラーに対応できなくなる』

「でも、どこでこんな情報を…」

『まあ、気にするな。不完全な魔方阵には三分の二の魂を掛ける必要がある』

「はあ、それじゃあ僕の寿命も三分の一になるだろ」

『気にするな』

「さっきから、そればかり」

『気にするな』

「あんた、本当に悪の代表かよ」

『甘いな』

そう最後に言って、デスメーターは去って行った。

その後、僕は神の母体を見つけて、自分の魂の三分の二を犠牲にして、神を粉碎した。

さすが、魔方陣といったところだ。

しかし、どこかに腑に落ちないものが残った。

元の世界に戻っても、マリモとグラムは存在せず、僕は孤独な一生を送ったのだった。

最終話 **b a d e n d** (後書き)

この物語は、このバッドエンドで終わりに見えないでしょうか？

まだ、この物語は続く。しかし、これがこのファウンの限界なのです。本当なら、あの二人を探すべきだった。

デスマーターの罠にまんまと引っ掛かったというわけ。それが、デスマーターの仕事だから、当然ですね。E／N／Dです…ありがとう皆さん。いろいろとこの世界バッドエンドばかりですね。少なくとも、僕はそうですから。

本当の最終輪 心の魔方陣（前書き）

また会う日まで

本当の最終輪 心の魔方陣

桃野まりも 十五歳 のんびり屋に見えたが本当はとても冷静……
レイチャラー・グラム ∞歳 死んだ状態をセーブすることによ
ってあらゆる魔法を可能にした最強……

私がいながら、これでは。

そう、私は思った。

しかし、私にできる最後の治療は、これしかない。もう一度だけ
チャンスを与えること。

人生というのは、本当のチャンスは一度しか来ない。それだけど、
私はもう一度だけチャンスを与えたい。愛する、ファウンのために。
ずっと好きだった、ファウンのために。

○○○

気がつけば、僕はあの平野にいた。すべてが暗黒の。
でも、なんとなく一度見た気がした。

そうだ、僕はここで間違えた。

自分を犠牲にしたのに、マリモとレイチャラー・グラムを助けら
れなかった。

「あーあ、どうしよう」

僕はふと気づいた。

目を凝らせば、いたるところに神たる母体がある。

これは、きつと罠。

神を探し見つけさせることで、安心させる罠だったのだ。

何処までも、続く神への長い道のりはウソだった。

僕は今、すでに神の前にいる。

「どうすればいい」

僕は、簡単な答えが導き出せない。
すぐ目の前に本体が存在するのに。

そう、それが人間の限界なのだ。

魔法を使っても、ムリだろう。

しばらくすると、デスマーター幹部もやってくる。

それまでに決着をつけないと、もう一度同じ結果を生む。
考えろ！

「そうか、母体の中に二人がいるんじゃないだろうか。でもどの母体……」

その時、心から響くものを感じた。それは絆だった。

心の中に魔方阵が描かれていくのを感じる。

これが、心の魔方阵。

願いが結晶となっていく。

それは、一つのメロディを紡ぐようであった。

僕は、その絆に導かれるように、平野を歩いていった。

魔方阵の力で、すべてが浄化されていく。

この世界の暗黒さえも。神の母体さえも。

気づけば、何も無い真っ白な世界に僕とマリモとグラムが居た。

「ありがとう、二人とも。二人のおかげで」僕は一足先に礼を言う。

マリモ「そんなことない。あなたは自分で答えを出したのよ」

グラム「きっとあなたは分かっていたの。神を塗りかえられるのは心だ。強い絆だって」

マリモ「あなたが私達を信じてくれていたことは何物にも変えがたいもののよ。ありがとう」

グラム「何とか助かったわ。さすが、魔法使いの端くれ。未熟ながらよくやったぜよ」

「本当に、やったね。これはきっと、すべての人の優しさや、思いやりのおかげだよ。僕は、初めて他人を守りたいって思った。人は、攻撃するだけじゃ駄目なんだ。守る心も必要なんだ」

僕は、そんな風に最後に思った。

物語はここで終わるけど、まだデスメーターは居る。

だから、また物語は進展を見せるかもしれない。

とりあえず、神が崩壊し、何かが変わると思う。恐らく、それも

僕たち三人でしなければならいんだと思う。

魔方阵が、僕を最後に助けてくれたように。

僕自信も誰かを助けられるくらいに強くなりたいと思う。

こんな悲劇がもう、起こらないことを願う。

また会う日まで。

まっ、たぶん会えるから。

E／N／D

本当の最終輪 心の魔方陣（後書き）

デスマーターは生きているし、あの日の謎もまだあまり解決していない。だからこそ、この物語の限界はここまで。

恐らく、もう一人、最強の頭脳を持ったあの男がいずれこれを解決すると思う。それは誰かは、近い未来で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7310y/>

魔方陣に願いを

2011年12月2日16時47分発行